

「教育的スロイド」の成立をめぐる

横山悦生

1. はじめに

学校のカリキュラムの中にもものづくりにかかわる教科がいつからどのようにして登場したのかを正確にとらえておくことは、今日のこの教科のあり方を考えるうえで意味のあることである。日本の小学校（高等小学校、当時は第5学年から第8学年）のカリキュラム（ただし、男子のみ）に手工科が導入されたのは、1886（明治19）年5月のことであった（女子には裁縫科がより早く導入されているが、この点については別の機会に論じたい）。今から120年近く前のことである。日本の手工科は、当時の国際的な動向とかかわって導入されたこと、なかでもスウェーデンのスロイドとフランスの手工（科）教育がモデルとされたことはこれまでの研究で明らかにされている。昨年出版された宮崎擴道著『創始期の手工教育実践史』（風間書房、2003年）では、日本の手工科はフランスの手工科をモデルにしたとされている（同書44頁）。筆者は、別稿において、日本の手工科に対するスウェーデンのスロイドの影響を教育交流の面から解明し、スロイドの影響が少なくなかったことを明らかにした（拙稿「手工科成立過程期における日本とスウェーデンとの教育交流——手工科に与えたスロイドの影響の再評価——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第50巻第2号、2004年3月）。

表題に「教育的スロイド」（pedagogiska slöjden）という言葉掲げたが、この言葉は1880年代のスウェーデンにおいて、オットー・サロモンという人物が提唱した概念であった。この言葉を掲げて、サロモンは、子

もの発達（人間形成）に主要な目標をおいた手工科（教育）の内容や方法をつくりだそうとした。本稿では、この「教育的スロイド」が北欧においてどのように成立していったのかについて、北欧での調査をもとに明らかになったことを中心に述べてみたい。

2. ウノ・シグネウスと「教育的スロイド」

世界で最初に手工科を民衆学校（Folkskolan）のカリキュラムに導入した国はフィンランドであった。この教科の導入に大きな役割を果たしたのが、そのフィンランドで1866年からスタートした初等教育制度の基礎をつくったウノ・シグネウスであった。シグネウスがなぜ手工科を必修教科としてカリキュラムの中に導入したのか。そして、その手工科の教育内容をどう具体化したのか。これらについてシグネウス自身が語っていることを少し長い引用になるが、以下で紹介する（ウノ・シグネウスからオットー・サロモンにあてた手紙（原文はスウェーデン語）、1881年9月29日付、ヘルシンキ図書館所蔵）

「私の子ども時代において、早く他界した父は、いろいろな作業場にわたしを連れていき、私の心にさまざまな手仕事に対する関心をうえつけました。私はすでに12歳のときにはさまざまな木工作业や旋盤で削ったりする作業ができ、一般的な技能を身につけていました。そして、そのことは私の人生において非常に役立ちました。それゆえ、私が成人になって教育学の勉強を始めたとき、手の労働（handarbete）を学校の生徒たちに実行させる博愛主義者たち（フィランソロピスト）の試

みに影響を受けたように思います。しかし、私は実際になぜそれらの試みが成功しなかったのかをすぐに理解しました。つまり、博愛主義者たちはその学校における手の労働を手仕事の（handicraftの問題として）あつかい、まったく教育学的な教養のない、しかもそれをひとつの熟練技能〔craft〕の問題としてあつかう職人たちにまかせてしまったのです。

ペスタロッチの書物のより徹底的な研究を通して、ひとつの形式的(formelt)な教育(形式陶冶)の手段として学校において手の労働(handarbete)を教えることの重要性が私にははっきりとしてきました。よく知られているように、ペスタロッチは古いスコラスティックな詰め込み主義と内容のない機械的な暗証主義に対してたたかいました。彼は、他の矯正手段のなかで実物教授を強調し、子どもの成長にもとづいて、眼に訴える教育方法を強調しました。これもよく知られたことですが、ペスタロッチ自身と多くの彼の盲目的模倣者たちは、いわゆる実物教授、思考、話し言葉の練習において、退屈で、つまらないおしゃべりに退化しました。そして、それは、もはや発達や教育とはまったく別物でした。こうしてフレーベルが登場してきたのです。彼は、子どもにとって眼や他の感覚で外界の対象物を理解しようと試みたり、それらを描写することでは不十分であることを強調しました。そして、子どもにできるだけはやく自分の眼で理解したことを自分自身で形づくったり、自分の活動をとおして何かを創り出すことを教えなければならないとしたのです。この目的のために、彼は「恩物」(Spielgaben)を編集しました。それは、まず第一に球と立方体とそれらに関連づけた丸棒を含んでいました。さらに、ひもあみ作業やデザインにしたがつてつみきで組み立てる作業やあみものや刺繍の作業等々を内容としていました。これらの「恩物」は、確かに子どもの観察能力と形態感覚を高度に発達させ、ある種の一般的な

技能さえ身につけさせます。そして、それらは年齢の低い子どもたちにとって、あるいは学校の第一段階に対しては、非常に適しています。しかし、それらはほとんど平板な面を扱う作業であるので、それをとおして獲得した技能は、高学年の生徒や青年にはもはや適切ではありません。それゆえ、学校において手の労働を形式的な教育(形式陶冶)の手段(formelt bildningsmedel)として使うという原則を厳密に固持しながら、形態と美の感覚を発達させるような目的と同時により厳密なレベルで一般的な技能を教育するような目的をもって、高学年の生徒に適するような、ある種の手の労働を導入すべきであると考えました。それは、とくに木工作業、旋盤での作業、鍛冶、かご編み等々のような作業です。この点で、当然ながら民衆学校においてはさまざまな分野での高度な芸術性を達成させるようなことがあってはならないと思います。あるいは、ものを製作することにおいて工業製品と競争するような試みがあってはならないと思います。そうではなくて、生徒が小刀で切ったり、おので切ったり、鍛造したり、ヤスリをかけたりするような単純な手作業を学ぶべきなのです。また、同様にすべての作業をきちんと正確にこなし、均衡のとれた形やスタイルをもってすべてを正しくつなぎあわせることを学ぶべきなのです。このようにして、民衆学校における手の労働の設定された教育目標が達成されるのです。」

ここには、シグネウスが民衆学校(folkskolan)の高学年の生徒たちに「手の労働」を教育的な目的のもとに組織すること必要性の認識に至ったプロセスが語られている。彼は「形態と美の感覚を発達させる」目的と「一般的な技能を育てる」目的をもって「手の労働」の教育内容を「木工作業、旋盤での作業、鍛冶、かご編み等々のような作業」とした。シグネウスが初代校長であった、ユベスキュレの師範学校での必修教科であった手工

科の教育内容もそのような内容から構成されていた。しかし、このような多様な手工を教える試みは実際には成功しなかったようである（この点については、これまでに研究において必ずしも明らかにされていない）。こうして、オットー・サロモンが登場した。

3. オットー・サロモンと「教育的スロイド」

オットー・サロモンは、1877年初夏にウノ・シグネウスをユベスキュレに訪問した後、スロイド教員養成についての示唆（職人ではなく、民衆学校教員をスロイド担当教員として訓練することの重要性についての示唆）をえて、1878年から短期の講習会を開始した。そこへの参加者や訪問者との議論をとおして、モデル・シリーズといわれるオペレーションの難易度と組み合わせた日用品の製作物のセットを完成させていった。それをふまえて、サロモンによって提唱された「教育的スロイド」の考え方は1880年代半ばにはスウェーデンの多くの地域に受け入れられるようになり、また世界の国々にも普及していった（ネースの夏期手工講習会には35ヶ国から参加している）（Hans Thorbjornsson, “Naas och Salomon — slojden och leken”, 1990）。サロモンは、手工科の教材を木工に限定してモデル・シリーズをつくりあげた。しかし、サロモンもシグネウスと同様に1870年代までは多様な種類の手工をとりあげていた。1878年のネースのスロイド教員養成所（主として職人を対象とした1年間のスロイド担当教員養成コース）での手工の実習のねらいとして「指

物作業、旋盤作業、木工彫刻、鍛冶作業などの異なる道具を知ることと、これらの道具の扱いに慣れること、簡単な道具や家庭で用いる器具を作ったり修理したりすること、質素な家庭にあわせた家具の製作、荷車の車輪や本体の製作、大きな刃物の製作とヤスリを使った作業」があげられていた。これらの内容は1878年のスウェーデンの最初の民衆学校のカリキュラム（“Normalplan för undervisningen i folkskolor och smaskolor”）におけるスロイドのねらいと対応していた。すなわち、それは次のように規定されていた。「スロイドの教育に際しては、男子生徒に普通に（家庭に）存在する道具、とりわけ木工道具、もし旋盤や彫刻や鍛冶などの道具があるならば、そのような道具を使用することをまず教えること、その際に農民にとって特に必要な対象物が製作されるべきである。」ここから、当時のスウェーデンの農民の日常生活にとって木工道具とその使用法がきわめて重要なものとされていたことが読みとれる。このことが、サロモンが木工を重視した大きな理由であると考えられる。では、次にサロモンは、なぜ木工に限定したのか。そして、彼が定式化したいくつかの原則（ここでは紙数の関係で触れることができないが、「易しいものから難しいものへ」などの原則をサロモンは定式化した）についてサロモンがどこからそのアイデアをえたのか。これらの点についてサロモン自身は多くを語っていない。いま、筆者が追求している課題の一つはこの点にある。他日を期したい。

(名古屋大学)